

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.243

ISSN 2432-5295

昇

CONTENTS

- ◆【昇】…01～04
- ◆今、こんな仕事をしています…05～08
- ◆近況&イベントのお知らせ…09～10
- ◆まちかど…裏表紙



日が昇る、日の出湯
地域産業イノベーショングループ／有田建哉

京都に引っ越してきてから「銭湯巡り」にハマっています。旭日昇天の勢いで仕事に励む日々からのリフレッシュを求めて駆け込んだ銭湯に魂をふやかされてしまったのが、銭湯にハマったキッカケでした。調べてみると、京都は平安時代末期に初めて湯屋（湯浴み）が開かれた、銭湯の聖地だそうです。京都には80ヶ所以上の銭湯がありますが、今までに巡った湯は8箇所（少なっ!）。中でもお気に入り、京都駅南に徒歩10分、日が昇る、日の出湯です。銭湯に入ると2時間は出ません。一週間溜め込んだ疲労をゆっくり湯に溶かし昇華させています。そして、昇天しそうな自我を取り戻すため、じっくり時間をかけて自分と向き合い、気持ちと思考を整えます。これで次の月曜日にはスッキリにっこりです。興味があれば一度、銭湯で魂をふにゃふにゃしてみませんか？お供させていただきます。

昇

新年あけましておめでとうございます。

2024年最初のレターズアルパックは年頭らしく「昇」というテーマでスタッフからの小文を集めました。

「昇」はもともとは太陽がのぼるという意味だそうです。「枕草子」のあまりに有名な書き出しは「春はあけぼの…」。太陽がまさにのぼり始める直前の、山ざわがほのぼのと明るくなっていくさまの美しさにあらためて着目したのです。敬服すべき清少納言の美的センスです。

私たちも経済性や合理性ばかりに踊らされることなく、社会を美的にデザインしていくことに貢献していきたいものです。

レターズアルパック編集委員会

キラキラキャンペーン

生活デザイングループ／内野絢香

最近、業務でパイロットに取材をしたせいか「昇」と聞くと、そのパイロットを連想してしまいました。

同世代だったパイロットの口から出てくる言葉には、今後の自分への希望や期待が感じられ、やっぱり何かに向かってまっすぐ前を向いている人は、上昇気流を巻き起こし、キラキラしているなと思いました。そんな思いに触発されたのか、取材の日から私の中で「キラキラキャンペーン」を実施中です。まずは、住んでいる団地の共用ベランダで育てだした、枯れそうなハーブたちのお世話をしつつ、目標である私なりの「住み開き」の形をベランダで模索する日々をはじめました！



昇と降

都市・地域プランニンググループ／石川聡史

「昇」は上昇を意味するので、反対語は下降の「降」でしょうか。

これまでの風潮では、成長や大きくなるのが良しとされ、「昇」はポジティブな感じですが、「降」は暗いイメージを想像してしまいがちです。

ですが、これから社会全体が縮小していく時代を考えると、これまでのような上昇・拡大志向だけでは社会も人の気持ちも持たないような気がします。昇ろうが降りようが、そこに良し悪しはなくただ違うステージに進んでいくだけ。そう考えるとそこで得られる新しい経験や気づきに、価値を見いだしていくことが大事なのではないかと思っています。

ウェルビーイングな毎日へ

地域産業イノベーショングループ／江藤慎介

福井県若狭町に新しく出来たキャンプ場「山座熊川」で、「ウェルネスツーリズム」のプログラム開発に関わっています。トレイルウォーキングや坐禅などで自分自身と向き合い、健康的で美味しい食事に満たされるプログラム。あわせてスマートウォッチで「心の疲れ」を測定しているのですが、これが面白いのです。日々の生活の中で「心の疲れ」は増減を繰り返すのですが、何をしているときに心の疲れが上昇しているかが分かり、プログラムで学んだ「リセット」を試すと下降します（多分）。

今年も心の疲れをほどよくマネジメントし、ウェルビーイングな毎日を送りたいと思います。

人を見る

総務部／宇都宮和文

以前の職場では昇任するためには年に1回の昇任試験で良い点数を取ることが必須だった。もちろん普段の勤務評価が一番のウェイトを占めるのだが、仕事の良し悪しを評価するのは難しい。

試験とは目に見える形で優劣をつける手っ取り早い方法だったのだろう。人が人を評価する人事評価制度では普段からその人を良く見ておかなくてはならないと考えるが、私は普段から相手を見て仕事ができているだろうか？この記事を書きながら反省している。

普段から相手をよく見て、眉間にしわよせてないか？顔色悪くないかなど目配り・気配り・声かけができる人になれるよう心がけます。

『昇運守』に期待を込めて…
都市・地域プランニンググループ／清水紀行

10月末にグループ研修旅行で青森を訪れ、八戸の蕪島神社に立ち寄りしました。日没後に到着したため暗闇の中でチラ見ただけでしたが、その後の居酒屋で「蕪島のご利益はすごいですよ。常連さんは宝くじが当たり仕事も大成功」という話を伺い、「再び行かねば！」と翌朝にきちんとご挨拶してきました。



ちなみに蕪島はウミネコ繁殖地として国天然記念物に指定されており、繁殖期には3万羽の大群が訪れるそうです。またウミネコは神の使いで、彼らの糞が当たると幸運が訪れるとか…残念ながら糞には当たりませんでした。宝くじが当たった暁にはグループの皆さんを海外研修にお連れしたいと思います。

インクルーシブなまちづくりを夢見て
生活デザイングループ／嶋崎雅嘉

「昇」という字は、ただ単に上に行くという意味だけではなく、「天」や「空」に向かっていく意味が含まれているそうです。何か大きな目標に向かって、一步一步着実に進んでいくイメージを思い浮かべます。

私が思い描く「目標」としては、まちで住み、働き、過ごす人たちが、「こんなまちにしたい」「こんなことができたらいいな」と思い描き、それを気軽にチャレンジしたり参加ができる。そんな「場」と「きっかけ」「仲間」があるまちを育てること。それはきっと誰もが楽しく安心して暮らせるインクルーシブなまちになると夢見ております。自分自身も「広」げたり、「遊」んだり、「出会」ったりしながら、少しでも「昇」っていきたいと思います。今年も皆様お付き合いいただければ幸いです。

龍
建築プランニング・デザイングループ／杉本健太郎

昇と言えば、龍を連想します。私は昔から龍が好きです。小学生の時は、図画工作展に展示する龍の物語の絵を授業後も居残りしながら、のめり込んで描いていた思い出があります。大人になってからも、お寺を訪れた際は、天井画に龍が描いてあると、思わず見入ってしまいます。また、台湾を旅行した時に、ガイドさんが言っていました。5本爪の龍が描かれるのは、皇帝のみしか許されなかったようです。さて、私が好きな虫の世界にも龍がいます。トンボです。英語でDragonfly(ヨーロッパではドラゴンは邪悪な存在として描かれがちですが)、かっこいいですね(なお、イトトンボは、Damsel fly)。

プロ野球では、2023年は、猛虎の年でした。2024年は、昇竜に期待です。燃えよ、ドラゴンズ！

昇華
建築プランニング・デザイングループ／新開夏織

“昇華”とは、理科で「固体が液体を経ず気体となること」と習いましたが、心理学ではストレスや衝動などへの対処(防衛機制)の一つで、「怒りや劣等感など、社会的には認められないであろう欲求や衝動を学問や芸術活動など社会的に望ましいとされる方向に変化させること」の意味で用いられています。自分のエネルギーを別の(良い)形で表現しようとするのは、大変有益なことだと思います。この昇華を活用するには、①自分の感情等を知り、②現実に直面し、③自己表現することが大事だそうです。

色々なことのある日々の中で、自分とどう向き合い、対処していくかを考えることは、とても重要なことだと感じています。今年も行き詰った時にも「昇華」を意識して、健康に、前を向いて歩いていきたいと思っています。

ぎふのまち
地域再生デザイングループ／辻寛太

最近、地元の岐阜市を紹介する機会が増えました。岐阜市は平坦なため、高い場所からは市街地を一望することができます。私が紹介する際は、まちの全体を見たいので、高いところに登って案内しています。岐阜市の全体が見れる高い場所は二か所ありますが、その一つが市街地の北にある金華山です。山頂の岐阜城からは、岐阜のまちと長良川を一望することができ、天気が良ければ名古屋のビル群まで見渡すことができます。



岐阜市を訪れた際はぜひ金華山に登り、信長が見た同じ景色を体感してみてください。

おのぼりさん おくだりさん
サスティナビリティマネジメントグループ／張玉鈴

京都の西北にそびえる愛宕山は古来より多くの人の信仰を集めている。愛宕山では、愛宕詣りを終えた下山者がこれから山頂の愛宕神社に向かう登山者に「おのぼりやす」と、逆に登りの人は下りてくる人に向けて「おくだりやす」と声を掛け合うのだという。この独特な挨拶の習わしは、愛宕山のほかにもう一か所、愛媛県の西日本最高峰・石鎚山に残っている。石鎚の山頂にも神社があり、行き交う人々は「おのぼりさん」「おくだりさん」と挨拶をするそうだ。

思うにのぼりとくだりは一揃いで、この生も産み落とされ昇天するまでの1セットとみることができる。何か昇るとき同時に降りていくものがあり、下(くだ)るときも同様に登るものがあることに心を寄せていたい。

階段のとりこ
企画政策推進室／中村孝子



パレスサイドビル
(設計：林昌二) 内の「夢の階段」

建築めぐりをしていると階段の美しさにハッとすることがあります。職人技が光る重厚な彫り物の親柱や手すり、フィボナッチ整列が潜んでいる螺旋階段などなど。時にはエントランス空間を支配するその存在感に圧倒されます。階段は上り下りする目的で作られたものですが、観方によると芸術作品でもあります。

近年は、「階段の魔術師」ともいわれる巨匠村野藤吾の軽やかな曲線に目覚めて、階段目的に旅に出ることもしばしば。素敵な階段に出会うと、天にも昇る気分になります。今年もいい出会いがありますように。

次のステップ
総務部／仲野めぐみ

「昇」という漢字は1つ上のステップへあがるというイメージがあります。我が子達は現在中学3年生と小学校6年生で、4月からそれぞれ高校、中学へと次のステップを踏み出そうとしているところです。最終学年という事もあり、1つ1つ行事が終わっていく寂しさを感じつつも、この1年間はコロナで規制だらけの3年間を乗り越えた日常のありがたさを噛みしめながら、どの行事もそれぞれに立派な姿を見せてくれました。たくさんの感動を子ども達からももらいました。

新しい環境になっても、大きく羽ばたいてほしいと切に願っています。



目線を上げて視野を広く
都市再生・マネジメントグループ／羽田拓也

40代に突入してからというもの、上昇しなくていいものが順調に上昇し、上昇させたくても上げづらいものが出てくるなど、体の変化がはっきりしてきました。自分自身を俯瞰しながら順応しつつありましたが、昨年、自分では上げようのないもの、不可能なものも加わりました。

こうした状況では焦燥感、雑念みたいな“気持ちの摩擦”を起こしがちですが、そういう場面も俯瞰しながらなんとか前向きなマインドや熱意に昇華させ、摩擦によるロスを減らし、所属チームや関わる各地域の熱量アップ、ひいては、より良い地域づくりへの貢献に少しでもつなげていく1年にしたいと思っています。

昇り調子にあやかりながら
都市再生・マネジメントグループ／西村創

年を重ねるごとに右肩上がり、昇り調子とはいかない年齢になりつつあります。下の子どもが1年生からはじめた小学校のサッカークラブのコーチをはじめ1年以上が経ちました。子どもとの共通の趣味ができるとともに、やっとパパコーチ友もできて、少しだけ子育てに参加している気になっております。まあ連れ合いからは、自分が好きなサッカーしてるだけやと言われていますが・・・

そんな中でも、ものを教えるという行為の難しさを実感しております。すぐ調子にのる子、ほめて伸ばさないといけない子、何をいってもマイペースな子。2年生ぐらいだとなかなか動物園の園長ぐらいの気持ちですが、元気な子どもたちの昇り調子にあやかりながら、今年も公私ともに一年頑張りたいと思います。

スカイスパイ (ゲイラカイト)
都市・地域プランニンググループ／福井秀樹

お正月に「昇」と言えば、私が子どもの頃はやり始めた大きな目玉の描かれたゲイラカイトを郊外の大樹林地の片隅にあった採石場であげたことを思い出します。カイトが青空に吸い込まれるようにどんどん昇って行き、やがて目玉が見えなくなるほどに。実は今、その場所に関する調査に関わっています。砕石場と思っていたところは、違法開発により中断された開発地で、今はグラウンドになっているものの、周りの樹林地は今も未整備公園のままです。半世紀も経って思い出の場所の調査に関わるとは・・・。私が住む名古屋市内には「昇」に限らず、感覚と結びついた思い出の場所ばかりで、そんな場所のまちづくりに関われることをうれしく感じながら業務に取り組んでいます。

2024年
ソーシャル・イノベティブデザイングループ／深谷弓希子

レターズ新年号が発行されるのは、2024年ですが、この原稿を書いているのは2023年。

年末年始は何をして過ごそうか、大掃除の計画や食べたものなど、思いをめぐらせています。読みたい本や見たい映画もあるので、それも楽しみにしています。

2024年の良いスタートをきれるように、年末年始を有意義に過ごしたいと思います。

皆さまにとって、2024年が、上昇していくような、より良い1年にありますことをお祈りしています。



新しい形を探して
建築プランニング・デザイングループ／山崎博央

ここ数年、卸売市場の再整備に係わる機会が多く、北は東北から南は四国まで、あちこちの市場へ移動の毎日です。その市場再整備の仕事でよく出てくる言葉が「物価上昇」や「家賃上昇」。何か気分が下がりますね。市場で働く方々と話をしている、なかなか明るい話題になりにくいですが、地域の食を支える大事な社会インフラである卸売市場です。いろんな産地から集まったさまざまな野菜や果実、魚や花などが売場いっぱい並ぶ光景は見ていてワクワクするものがあります。このワクワクがそれぞれの地域に広がるような新しい市場の形をみつけられないだろうか、などと考えつつ、気持ちを上げながら日々精進していきたいと思えます。

日々これ精進
ソーシャル・イノベティブデザイングループ／藤田始史

昔自分の名前を姓名判断したことがあります。結果は「波乱富貴」。昇沈がありながらも、最終的には幸せになるとのことでした。喜んでいいのかわかりません。それが本当かどうか気になって、占いが出来る友達に占ってもらいました。「フジタの人生の絶頂期は70代です。老後はお金に困りません。それまでは波が多々あります。」とのことでした。遅すぎますよね、絶頂期。

70代までだいぶ先なのか、あつという間なのか分かりませんが、どうやらそれまでは下積み生活が続くようです。少しでも早く昇っていけるように、今年も精進を続けます。よろしく願いいたします。

生と死 その瞬間の美しさ
地域再生デザイングループ／山本貴子

千葉県の大吠埼という岬では、私の産まれた日・産まれた時間に、高地や離島を除き日本で一番早く日が昇ります。それを知って、ある年の誕生日に、日の出を観るために大吠埼にでかけました。

日の出なんて、それまでに何度も観ていたけれど、その時に観た日の出は、やっぱり特別です。日が昇るこの瞬間に、私の人生が始まり、ここまで生きてきたということを振り返り、家族・友人、周りにいてくれる人や育ってきた環境に対して、感謝の気持ちでいっぱいでした。そして、日が昇り、沈んでいくのと同じように、私の人生も終わる時が来る。その日まで、ちゃんと生きていきたいと思えた光景でした。

はじめての「社会生活」
地域産業イノベーショングループ／山部健介

2歳半の娘が今年から幼稚園に入る予定です。つい先日まで赤ん坊だったのが、今では人一倍元気に公園を走り回って（冬でもたまに裸足で）、休日は一緒にサッカーをするようになり、日々成長を感じているところです。

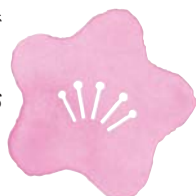
はじめての集団行動、社会生活をできるのか…不安ではありますが、「パパちゃん、あたち幼稚園いくの!」と思いのほか楽しそうに、「プレ幼稚園」に通っているのを見ると、上手くアジャストしてくれそうな気がしています。娘が成長していく姿をみると、私自身も公私ともに成長していかなければ…と思う次第です。



今年は「昇」らない
公共マネジメントグループ／渡邊美穂

ここ数年、新年号に寄稿して1年間の抱負を宣言しています。寄稿したら忘れてしまう抱負でもあるのですが、昨年は確か「チル」だったかと。華々しく散るといよりは、相変わらず砕け散ることが多い1年でした。

今年は「昇」。あがるのはよいのですが、その後はさがることもあります。自分は興味関心、感情など、あがって、さがって、せわしない性質で自身に往生しています。ですので、今年は「あがる」ことはしないで「ニュートラル」を意識して行動できれぱと思います。本年もどうぞよろしくお願いたします。



超昇寺城と城
都市再生・マネジメントグループ／山本昌彰

「超昇寺城」という城、ご存じでしょうか。私の家の近く奈良西大寺にその跡があります。室町時代、超昇寺の僧が出自とされる在地土豪の超昇寺氏の築城らしいのですが、城といっても、天守などありません。そもそも、皆さんが描く天守は織田信長が創出したもの。城は、弥生時代の環濠集落からはじまり、武士の館や領主の居館などを含め、全国に4~5万以上あるともいわれ、うち天守をもつものはわずかです（さらに現存天守は12城だけです）。ここ超昇寺跡は、今は竹林で何もありませんが、よくみると空堀などの土塁らしきものも確認できます。室町時代、領主のお城をイメージし「攻城」してみましよう。

板橋区赤塚四・五丁目地区で、景観の魅力を体感する「まちあるき」を行いました

末次優花：
都市・地域プランニンググループ

板橋区赤塚四・五丁目地区では、令和5年度から「景観まちづくり」に向けた取組みが始まっています。

このうち、地域住民に向けた勉強会「フムフムあかつかPROJECT」では、11月29日に第1回勉強会として、まちあるきを開催しました。赤塚四・五丁目地区は崖線を有し、起伏に富んだ地形（スリバチ地形）や樹林地などの自然環境が景観の特徴です。そこで「地形」と「みどり」の2コースに分かれてまちあるきをしました。

地形コースは、東京スリバチ学会会長の皆川典久さんとともに、地区内の坂やスリバチ地形などをめぐりながら、地形と暮らしの関係を学びました。みど



スリバチ地形の坂道を歩く

りコースは、NPO法人みどり環境ネットワーク！事務局長の村田千尋さんとともに、赤塚氷川神社などをめぐり、まちのみどりの魅力や効果などを学びました。振り返りでは、「長年住んでいて知らなかった地形に驚いた」「生活に追われてみどりの豊かさに気付いていなかった」など、まちの景観の魅力を初めて実感できたという感想が多かったです。今後も勉強会を重ねることで、さらに景観の魅力を高めるにはどうしたら良いか、話し合っていきたいと思えます（詳しくは241号記事参照）。



木の筒から木が生えている！
面白いみどりを発見



普段は通り過ぎるだけの道で、
樹木に目を向ける

オープンイノベーションを促すコミュニティの要素・要件とは？

倉見祐子
企画政策推進室

近年「地域一体型オープンファクトリー」など、業種業態は異なれど共通の目的・理念を持ったメンバーで構成されたコミュニティが、社会に与える影響に注目が集まっています。

このコミュニティは既存の業種や商習慣の枠組みにとらわれず、何らかの「地域課題やテーマ」に着目し、それに取り組もうとする人とそれを支援・理解する人たちによって構成されています。それは従来のような同種同業が契約書でつながるのではなく、異種異業が共創の概念でつながるからこそ、多様な人材が集まり、自由な連携が生まれ、「オープンイノベーション」を促す土壌が育まれるようです。

近畿経済産業局では、そんな「地域の特性・個性を活かした『Social Good』なオープンイノベーションを生み出すコミュニティ」を「Local X Lab」と位置づけ、この取り組みをさらに加速させるために各地のコミュニティ・キーパーソンによる公開討論会を全国各地で計8回開催。うまく機能しているコミュニティを持つ要素・要件や、イノベーションを巻き起こすメカニズムについて検討し、次代の

産業クラスター政策につなげようとしています。地域産業イノベーショングループでは、この公開討論会「Local Xフォーラム」の事務局と、そこからエッセンスを抽出してまとめ上げる業務を支援しています。

8月27日福井を皮切りに、大阪・八尾、香川・東かがわ、群馬・桐生、岩手・遠野、大阪・梅田、東京・渋谷で既に「Local Xフォーラム」を開催し、残るは2024年1月15日の山形・新庄のみとなりました。人を巻き込み、コミュニティを育て、社会のうねりとしてきた名だたるキーパーソンによる公開討論はさながらジャズのセッションのようで、即興でありながら自然と共鳴し、新たな発見や気づき、学びに富んでいて、業務ということ忘れてしまうほどです。

私見ですが、イノベーションが生まれる土壌づくりに欠かせない要素・要件は社内組織にも通じると思いますので、今回の業務で抽出された要素は社内風土づくりにお悩みの方にも大きなヒントになるかと思えます。今年度末に業務が滞りなく遂行できましたら、また皆様にもご報告できればと思っています。



たった1本の原木から村づくりの道を昇る

高坂憲治

建築プランニング・デザイングループ

皆さんは、北山村という村をご存じでしょうか？「ああ、あの和歌山県の飛び地の村ね」、「日本で唯一の北山川観光筏下りをやっている村だね」。

そうです、北山村は紀伊半島の南東部にある人口400人ほどの小さな村です。和歌山県ではありませんが、村の周囲は奈良県と三重県です。その北山村の「じゃばら」を、ご存じの方も多いことでしょう。「花粉症」に効果がある成分を含んでいるということで、試してみた方もいるのではないのでしょうか。

2023年11月4日、晴天のもと、北山村新じゃばら加工施設の落成式が多くのお客様のご臨席の中行われました。私たちが最初に、このプロジェクトの計画と設計のために村を訪れたのは、平成29年（2017年）2月のことです。ほぼ7年になります。

じゃばらは柑橘系の木で北山村が原産地とされています。江戸時代から庭先に植えられて、北山村では正月料理のさんま寿司や昆布巻に絞汁を酢の代わりに使っていたそうです。1970年代、じゃばら栽培農家の訴えで村に残ったたった一本のじゃばらの原木を、柑橘類の分類で有名な田中諭一郎博士に調



北山川と新じゃばら加工場全景



じゃばらの実

査を依頼したところ、新品種と判明、1979年に品種登録されました。それから村はじゃばらの特産品として村の活性化に取り組み始め、1987年に加工場を新設、じゃばらの加工品を村内で製造できるようになりましたが、思ったほど売れませんでした。村民の期待を背負ったじゃばらは存続の危機に瀕しました。

2001年背水の陣で始めたインターネット通販と、一か八かで始めた「じゃばらが花粉症に効くかどうかモニタリング」が大当たり、売上が1億円を突破するようになりました。やがて、じゃばら抽出物に強い脱脂粒抑制作用（アレルギーを抑制する作用）があることが判明し、それがじゃばらに多く含まれる「ナリルチン」によるものと突き止められました。以来、じゃばらの商品アイテムも増え、じゃばらの生産が追いつかなくなる事態も発生するほどでした。

村は計画的に作付面積の拡大を図り、現在は年間120トンのじゃばらを取穫するようになって、さらに拡大をめざしています。じゃばらは接ぎ木で増やしていくのですが、北山村は山間地で自然条件が厳しいことから、成長に時間がかかるのだそ

うです。しかし、そうしてじっくり育てていくからこそ、強い酸味や心地よい苦みが醸成されるのかもしれない。

このように、じゃばらは時間をかけて過疎地といわれる北山村を支える大きな産業の一つに育ってきました。全国には、このような過疎地や中山間地と呼ばれる地域が数多くあります。その面積はわが国の多くを占めていますが、一部では荒廃が進みつつあります。しかし、人口減少や高齢化が進むこれらの地域は、大きな人口を抱える大都市地域の空気を水を含養しているのであり、北山村のような地域やそこに暮らす住民の生活が、これからは生き生きと続いていくことが、我が国全体にとって重要な課題であると私たちは考えています。過疎地や中山間地の地域づくりは、重要な都市問題でもあるのです。

新じゃばら加工施設の完成は、この村の中でじゃばらの生産、加工、販売が一貫性をもつて六次産業化され、北山村の活性化を目指す大きな拠点となると考えています。

こうした活動の中心を担うために組織された「株式会社じゃばらいず」には、多くの若者が集まってきています。事業所も村外に3カ所設立しました。

雇用の場の拡大による若い世代の活躍と定住促進は、北山村の活

性化には欠かせないものです。その意味でも、この新じゃばら加工施設の完成は村にとって大きな意味があり、そのお手伝いができたことは私たちの大きな喜びでもあります。

足掛け7年通い続けた道は、実は隣接する下北山村（奈良県）に30年近く通い続けている道でもありません。道はどんどん良くなり、沿道の景観も変化していきますが、北山村の道では年々じゃばらの木が増え、少しずつではありますが栽培面積が拡大していることを実感しています。いつも青々としたじゃばらの木ですが、小さな白い花を咲かせ、やがて緑色の実がなり、黄色く熟していくじゃばらの景観を観るのも、北山村に通う大きな楽しみになりました。

たった1本の自生のじゃばらの木から始まった北山村の村づくりの取組が、大きな加工施設の完成により新たなステップに向かって昇ろうとしています。この施設が、次代を担う若者たちと一緒にその目的を果たしていくことを切に願っています。



新じゃばら加工場全景



落成式会場

もといばテラスを開催しました

嶋崎雅嘉：
生活デザイングループ



椅子があると人が溜まり会話が生まれます

11月18日〜12月3日の期間、大阪府茨木市の元茨木川緑地において、「もといばテラス」という社会実験を行いました。

元茨木川緑地は、市の中心部を南北に貫く緑地帯であり、「元茨木川緑地リ・デザイン計画」に基づく再整備が進められています。また11月26日にオープンした複合施設「おにクル」も隣接しています。

今回の社会実験では、緑地空間に椅子やパラソルなどのフアニチャーを配置することで、来訪者が、心地よく滞在できるように仕掛けをするとともに、沿道のカフェ利用者がテイクアウトしたコーヒーなどを「もといば」で楽しむ



公共空間での過ごし方・使い方をもっと豊かに

ことを想定しています。

「もといば」を、もっと日常的にもっと多様な方がいるんな過ごし方のできる場所とするために、沿道店舗と「もといば」との関係性をもっていたり、椅子などのフアニチャーの管理の一部を担っていただきました。

将来的には、沿道の店舗だけでなく、市内の多様な企業に「もといば」への意識を持つていただき、活用や維持管理に関わっていただけるよう、事業者との関わりもつくっていく予定です。緑地や公園、道路などの公共空間を、市民サイドのアイデアと責任でもっと楽しく活用していただけるような将来を目指した取り組みがスタートしています。

三津寺の記念誌が出版されました！

筈谷友紀子：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ



約2年間にわたり、「大阪ミナミの観音さん」と親しまれている宗教法人三津寺（大阪市中中央区）の落慶法要を記念する冊子の作成をお手伝いしてきました。

作成にあたっては企画・編集をLLCインセクツさん、デザインをStudio Kentaro Nakamuraさんに担っていただき、当社では企画・制作協力を担当しました。

お寺の記念誌として製作はスタートしましたが、ミナミに関わるたくさんの方に読んでいただきたいという思いから、ミナミのカルチャー紹介やミナミと縁のあるクリエイ

ター・関係者の方に寄稿を頂き、どなたでも楽しめる雑誌「ME―御津と三津寺のこれまでもこれから―」として出版する運びになりました。

大阪市内の書店、Amazon、LLCインセクツ公式サイトから購入が可能です。ぜひご購入下さい。



記念誌の表紙

資源循環ビジネスセミナーを開催しました！

山口泰生：

地域産業イノベーショングループ



セミナーの様子

近年、産業界を取り巻く国内外の経済社会環境は著しく変化し、SDGsや脱炭素化、デジタル化等の進展により、今後、産業構造が大きく変革することが見込まれます。

島根県では、次世代産業分野として成長が期待されるグリーン分野への県内製造業の参入を促進し、新製品・新技術等のイノベーション創出を目指す「島根グリーンビジネスフォーラム」を設立して、さまざまなプログラムを実施しており、アルパックでは、そのお手伝いをさせてもらっています。

今回は、そのプログラムの一環として、「再資源化・リサイクルで稼ぐための資源循環ビジネスセミナー」を開催いたしました。

サーキュラーエコノミーなどの概念が普及している中で、「廃棄物」を「循環資源」として活用するなどの新たな資源循環ビジネスのポテンシャルが高まっています。本セミナーでは、当該分野の最前線でご活躍されている、一般社団法人サステナブル経営推進機構の壁谷武久氏をお招きして、資源循環に係る市場動向ならびに県内企業のビジネスチャンスをご講話いただきました。

壁谷氏のご講演をまとめると、①グリーンビジネスの推進においては、これまでの取引先に留まらず、市場全体を見渡す視点が重要、②サーキュラーエコノミーの推進においては市場の創造が不可欠で、供給者の論理ではなく、需要者の視点からの商品開発が必要、③新たな取組には新たなパートナーシップの構築が必要、本フォーラムなどを通じて連携強化はその具体策であるなど、県内企業の資源循環ビジネス促進に向けて大変重要なご示唆をいただきました。引き続き、アルパックとしても、島根県内のグリーンビジネス促進に向けて、尽力していきたいと思っております。

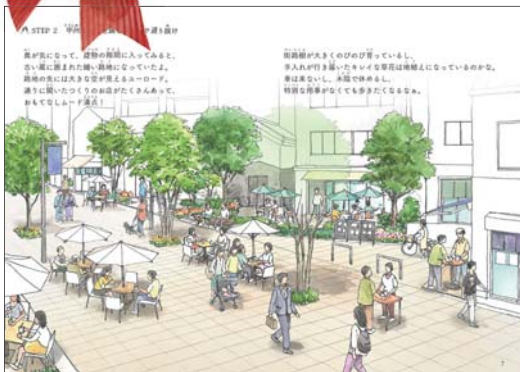
坂井信行：

東京事務所長

八王子市の景観絵本づくりの業務発表で都市計画学会長優秀賞を受賞！

都市計画コンサルタントが自分たちの関わった都市計画実務について発表する「都市計画実務発表会」は、都市計画学会と都市計画コンサルタント協会により共催されています。

今年度は去る10月20日に開催されました。アルパックからは「八王子駅周辺地区における景観絵本づくり」というテーマで私が発表しました。本業務は、八王子市景観計画に定められた重点地区である中心市街地環境整備地区のうち、八王子駅周辺地区における景観づくりの目標像の検討及び景観のてびきの取りまとめについて検討したものです。景観づくりの目標像の検討は、八王子駅周辺の未来の景観を考えるワークショップ・景観デザイン会議において地元事業者や複数の大



将来像をイラストで表現した絵本のページ

学の学生にも参加いただき、まちづくりやデザインの専門家のアドバイスも受けつつ、現地でのまち歩きや各大学の学生グループからの提案などをもとに議論を行いました。景観のてびきについては、目指したい景観の将来像をイラストで表現した景観絵本『八王子まちなか景観みらいものがたり』としてとりまとめました。景観づくりの目標像を『ふわっと』共有していくことで居心地よく、歩きやすい景観まちづくりにつなげていくことを意図したものです（本業務については本誌228号、223号にも報告があります）。八王子市では、この絵本に基づいて大学との協働により景観まちづくりの取組が進められています。本誌240号でも報告しましたが、その活動は令和5年度都市景観大賞景観まちづくり活動・教育部門において優秀賞（都市景観の日」実行委員会会長賞）を受賞しました。また、今回の実務発表会では私の発表が「都市計画学会長優秀賞」を受賞することができました。早速、八王子市の方にも報告したところ大変喜んでいただけました。業務に関わる機会を与えていただいた八王子市の方への感謝の気持ちを感じつつ、今後の励みにしたいと思います。

都市計画学会での活動について

筈谷友紀子：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

日本都市計画学会関西支部編集・広報委員会での活動に参加しています

アルパックでは日本都市計画学会関西支部の事務局を務めているほか、関西支部の諸委員会での活動にも参加しています。

編集・広報委員会では年数回発行する「関西支部だより」や適宜更新するウェブサイトにより、支部の活動内容や行事を広報し、また新しい都市計画の話題や事業の紹介等情報発信を行っています。是非ご覧ください。



関西支部だより
バックナンバー

関西支部
だより + plus

都市計画学会全国大会で研究発表を行いました

2023年度都市計画学会全国大会で修士論文「空間の残存と悲劇の記憶の継承の関係についての考察～空間の保存プロセスに着目して～」の発表を行いました。

今年度は盛岡市で開催され、会場では業務等を通じてお世話になっている先生方ともご挨拶させていただきました。



ポスター展示

また、アルパックでは都市計画学会全国大会においてポスター展示を行っています。毎年展示しているのは是非ご覧ください。

適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

59回

2023年
11月17日

「ローカルまちづくりとリージョナルデザイン」
講師 立命館大学理工学部建築都市デザイン学科
准教授 阿部俊彦氏

第59回適塾路地奥サロンでは、立命館大学准教授の阿部俊彦氏をお招きし、リージョナルデザインとまちづくりをテーマにお話いただきました。

講演では、地域活性化型のまちづくりでの事例を紹介しながら、ローカルスケールのまちづくりを一つの部分とし、地域における共通項・拠り所（滋賀県であれば琵琶湖）を中心にしたリージョナルなスケールのまちづくりを考えることが重要である、とお話いただきました。内容は、風景を通してリージョナルスケールを考えた例が興味深いものでした。風景は近景、遠景に分類して考えられます。近景は身近に見える風景、遠景は身近の範囲を超えたより広い圏域のまちづくりが織りなす風景のこと。つまり、私たちは風景を通して普段からリージョナルスケールを捉えているということを気付かされました。例えば、琵琶湖流域で言えば、地元のまちづくりも、琵琶湖の対岸のまちづくりも同様に大事であるということです。

今までのようにローカルスケールのまちづくりを大切にしながらも、今後は更に、地元のまちづくりと他のまちづくりとの関係性を調整し、リージョナルスケールを捉えたまちづくりを実践していくことが、リージョンの核である地域の拠り所の価値を醸成し、リージョン全体の幸福度を高めることになるだろうと思いました。（芳田知紀）

60回

2023年
12月1日

「世界の都市戦略と大阪のこれから」
講師 大阪公立大学大学院工学研究科
教授 嘉名光市氏

第60回適塾路地奥サロンでは、大阪公立大学教授の嘉名光市氏をお招きし、世界の都市戦略と大阪のこれからをテーマにお話いただきました。

講演では、御堂筋のフルモール化や、大阪・関西万博の開催を控え、都市の姿が大きく変わろうとしているこれからの大阪を、世界の先進都市の事例を交え、ポスト万博期を見据えて、将来に向けて大阪がどうあるべきか議論しました。

世界の先進事例紹介では、ニューヨークやパリ、メルボルン等を紹介していただき、先進都市においてのデータを活用した都市戦略の在り方を学ぶことができました。データに基づいた客観的な観点から、複雑化する社会変動にどの対応すべきなのか考えることができました。今後の大阪は、万博やIR等を控え大きく変わろうとしている中で、先進事例が取り組んでいる手法をインプットしながら、大阪の課題にどう向き合うかを考えさせられる興味深い講演でした。（吉岡志穂）



近況 & イベントのお知らせ

事務所だより

九州

「まちを通して学ぶ」

九州事務所 宮川武大

新年あけましておめでとうございます。昨年9月に入社した鹿児島出身の宮川武大と申します。鹿児島県の薩摩川内市で育ち、福岡にある九州産業大学建築都市工学部を卒業後、鹿児島の工務店で経験を積み、この度(株)よかネット(兼九州事務所)に入社いたしました。よかネットとの出会いは、4回生の卒業研究でまちづくりに関する研究を行った際に、よかネットへヒアリングに伺った時でした。私はそれまで、まちづくりの仕事について無知であり、どういったプロセスでまちづくりが行われているか想像もつかなかったのわかる人にヒアリングすることにしました。よかネットの方へヒアリングをした際に「話を聞いただけじゃわからないと思うからバイトをしてみないか」と誘われ、そこからアルバイトとして働くことになりました。大学卒業後は地元鹿児島で働いておりましたが、昨年9月によかネットへ戻ってまいりました。よかネットに戻ってからは、毎日刺激的な生活を送っています。まだまだ私だけでは仕事をするには出来ないのですが、裏を返せば、多くのプロジェクトにサポートとし

て関わられるので、建築や観光、環境や福祉など多くの経験をさせてもらえる良い機会です。

さて、入社してからは、休みの日の過ごし方が大きく変化しました。以前は家でゆっくりと過ごす事が多くありましたが、現在は、車を走らせ、知らないまちを探索しています。時には片道2時間以上かけてまちを訪れることもあります。最近では大分県日田市にある小鹿田焼の里に行ってきました。小鹿田焼は300年以上の歴史を持ち、世界一美しい民陶ともいわれており、その技術は一子相伝で受け継がれているそうです。また、小鹿田焼は原料となる土を砕く際に、ししおどしの原理で川の水を利用します。そのため、まちを歩くと川のせせらぎとともに唐臼の音が響き渡り、視覚と聴覚で楽しむことができました。知らないまちの個性や魅力を知り、知らないまちからちょっと知っているまちに変化していき、気づいたら知人にそのまちについて熱くプレゼンしていることもしばしば。そうやって知らないものを自分の体験を通して知っていくことをとても楽しく感じています。今年は昨年より多くの経験をして、関わる方々と盛り上がっていただければと思います。

全社研修会を実施しました

倉見祐子：

全社研修会実行委員会

12月7日に、年に1度の全社研修会を開催。各地の事務所から、下は20代から上は80代まで幅広い年代の所員が集まりました。

アルパックでは現在約100名が在籍しています。もともと「ごちゃまぜダイバーシティ」を標榜するアルパック。年代だけでなく、経歴や専門、価値観もかなり多様です。それが良いところではあるのですが、創業から50年以上経ち、所員が増え、事務所も東京、名古屋、京都、大阪、九州…と複数拠点になると、所員同士のコミュニケーションや組織風土醸成も容易ではなくなってくるもの。

そこで今回のテーマは「価値観の違いを共有しあい、より連携し合える組織へ」ということで、人づくり・組織づくりの研修会を実施することになりました。チームビルディングを専門領域とされる「合同会社カーニバルライフ」さんにお越しいただき、普段はワークショップを運営する側から、今回は実施する側にチェンジ。普段は業務での「行動」しかわからなかった同僚が持つ「価値観」を知ることで、納得した

り、意外に感じたり…でもみんな「地域や暮らしを良くしていきたい」という根っこの部分は同じだな、と再確認できた研修会になりました。会場は終始和やかで、所員からは満足度の高い感想があちこちで挙がっていました。組織づくりの研修に興味をお持ちの方は、ぜひ所員にお尋ねください。

相手の価値観を知り、自分の価値観を知ってもらうことで「インクルージョン」の道を一歩進んだアルパック。今後も組織風土醸成の取り組みは継続していきたいと思います。

(社内研修による休業でご迷惑をおかけいたしました。ご協力ありがとうございました)。





根こそぎ倒れた木
すぐ向こうに見えるのが岩むす樹海

依藤光代

ソーシャル・イノベティブデザイングループ



富士山から巡ってくる水と、風景のお話

富士山と水と聞いて思い浮かぶのは、山梨県にある「富士五湖」でしょうか。富士山からの距離が近く、雄大で迫力がある山容が湖面に映ります。

また、富士山からの澄んだ水が湧き上がる「忍野八海」があります。水草が揺れ、水車があり、桃源郷のような場所です。

では、静岡県側ではどうでしょう。三島では、街の中に水路が巡らされ、親水のデザインになっています。足を浸した時の清さと冷たさで、水が富士山からやってきたのだと直感することができます。小さな子から高校生まで、夏の午後に水路や公園で水遊びをしていて、地域のおじさんやおばさんとの会話が生まれています。富士山の水は、市民の暮らしと心を潤しているようです。

水がない場所——樹海
一転して、富士山麓には、水のな

い場所があります。——樹海です。昨年11月にグループ研修旅行で樹海を訪れました。樹海は千年以上前の富士山の噴火により、流れ出した溶岩に覆われた大地で、東京ドーム750個分の広さがあります。溶岩は多孔質なので、川も湧き水もありません。水もない、土もない場所に生えるのはコケで、樹海は今もコケに覆われています。溶岩の上に薄く堆積した土壌に、細い木々が生えていきますが、土地がやせているためある程度育つと倒木してしまうそうです。

樹海と普通の森林（つまり溶岩が流れた場所と流れなかった場所）の境目を訪れると、樹海の異様さがつきりします。樹海のすぐ外側の森には大きな木が立ち、落ち葉が降り積もっていました。すぐ隣にある樹海に顔を向けると、コケ、痩せた木やツタに覆われた緑色の世界で、くつきりと植生が異なります。

富士山に抱かれる街
研修の締めくくりに、富士山の富士山本宮浅間大社周辺を訪れました。大社からは富士山が見え、富士山からの水が川となり鳥居の横を流れていきます。ちょうど年に一度の例祭の日で、老若男女で境内周辺が

にぎわっています。海に面した富士宮の広い空を、ちょうど夕焼けが染め上げていました。私はその場にながら、時が止まったかのように感じていました。

あたりは、夜店に喜ぶ子どもたちの温かいざわめきに満たされていますが、夕暮れの淡いグラデーションの空に魅入られると、ざわめきは波が引くように消えていきました。見渡すと、赤い鳥居、大社と森、ずっと遠くに見える富士山があります。富士山も夕暮れの色になじんでいるものの、それでいて力強い確かな存在感を放っています。境内が、何か美しいものに満たされた、小さな世界として完結してしまったように思えました。時が止まるというよりは、時間の概念に刻まれる以前の世界のような。そのように感じられたのは、世界の中心のような存在を持つ富士山が、そこにあったからではないかと思えます。富士山に抱かれた街での、マジックアワーでした。



赤く染まる富士と富士山本宮浅間大社

表紙写真：精進湖と富士山（撮影 坂井信行）

「レターズアルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
<https://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・京都事務所	〒600-8006 京都市下京区四条通柳馬場西入立売中之町99 四条SETビル2F	TEL(075)221-5132	FAX(075)256-1764
大阪事務所	〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F	TEL(06)6205-3600	FAX(06)6205-3601
名古屋事務所	〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F	TEL(052)462-1030	FAX(052)462-1061
東京事務所	〒101-0032 東京都千代田区岩本町3-1-9 NOVEL WORK Iwamotocho 5F	TEL(03)5244-5132	FAX(03)6273-7715
九州事務所	〒810-0802 (株)よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F	TEL(092)283-2121	FAX(092)283-2128
滋賀営業所	〒527-0012 東近江市八日市本町9-14	TEL(0748)36-2065	FAX(0748)36-2168



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
kikittoペーパーを使用しています。